



PTAとスライド

波多野 完治

こんど「親の知らない子供の生活」というスライドが出来た。同じ題名の本があることはこの雑誌の読者はすでに知っておられることとおもうが、スライドはこれをもとにして「絵」にしたものである。子どものしかり方子どもに対する性教育の仕方、子どもの性感などがかなりよくとりあつかわれている。とりあつかわれている子どもの年齢は幼児である。

つくつた人は戸川行男氏と、望月衛氏。たしか本も同じ著者だつたとおもうが、望月氏はごく最近まで東宝教育映画株式会社にいた人だけにかなりうまく、むづかしい子どもの心理を「視覚化」しているようにおもう。

このスライド（幻灯をつなげて、一つおきのおはなし

にしてあるもの）は主題が幼児だが、小学生をとりあつかつたものは、今までに出していないので、小学校のPTAなどでも、ときどきこれを利用してゐることである。

わたしは、PTAの会合に時々よばれることがあるがそのたびに不思議におもうのは、PTAの会員が「長い話」をよるこぶさそうである。一時間の話よりも一時間半の話よりも二時間の話をこのむ。いやこのむのではないかもしれない。実際に二時間も講師の話をきいた日にはタイクツでたまらなくなるに相違ないのであるが、役員たちは、なるべくたくさん話をきかせて下さい、と講師に要求するのである。

まるで、講師からたくさんよい話をきけば、それだけで自分の子どもがテキメンに良くなるかのように。

しかし、講師の話は、決しておまじないではない。長い話をきいたからといって、そのことだけで子どもが急によくなるわけではない。

とすれば、話はごく簡単にして、事例について、具体

的につかぬるような工夫がPTAの会合などでは考えられなければならないのではないか。

このような工夫の一つとして、PTAで、前記のようなスライドをうつしてつかう。というのは、非常にいいことだともう。

ただ話だけをきくよりも、スライドをうつして、それについて説明してもらう方がよくわかることはたしかである。話だけだと抽象的になるところが、スライドにうつしてもらえば具体的になる。又、話はその場でおもいついたことをしやべるのだが、スライドだと、三ヶ月も半年も考えをねつて、これだけは是非必要だということのスライドの内容にするのである。

スライドをたくさんつくつて、その内容もヴァライエティーのあるものにし適当な講師と、適当なスライドとを組み合せて会をひらけば、ただ話だけの会よりもきつと役に立つことが大きいだろう。

「スライドならばいつでもみられるから」といつて、話の方だけをたくさんしてくる、という役員もときどきある

が、スライドはたしかにいつでもみられるが、スライドとむすび合せて話というものは、そのときでなければきけない。こういう話を講師の方も今後研究すべきだし、又会員の方でも実質的に得になる会のもち方を考えていかなければならぬだらう。

